

ICTから見えること

①⑥

インターネットを使った医療連携である長崎県の「あじさいネット」。なぜ、かかりつけ医が「情報提供病院」である拠点病院の電子カルテを見るという「片方向」システムなのだろう。

「双方向」の方が便利のようだが、システム構築や機器整備の費用はかさむという。現実的な選択肢として考えた結果」と、同ネット運営委員で長崎大病院の松本武浩准教授(51)は明快だ。

双方向の前提となる電子カルテ導入も進んでいない。厚生労働省の2011年調査では、一部導入や導入予定を含めても一般診療所は24%、病院でも34%にとどまる。

負担少ない仕組みを工夫

電子カルテ共有化に向けては、経済産業省が00年度補正予算で総額59億円を投じ、全国26地域で実証実験をしたことがある。熊本では熊本大病院など熊本市の大規模病院3カ所と14診療所が参加。2億円余りの予算をかけたが、06年で終了。双方向化の難しさを示した形だ。

あじさいネットは、かかりつけ医側は電子カルテ化不要で、手持ちパソコンに情報保護の暗号化装置を接続するだけで、パソコン初期設定費3万円、毎月の使用料4千円など負担も少ない。入会金5万円は所属医師会が参加していただければ不要だ。情報提供病院は規模に応じた機器整備に800万円～1400万円かかるが、システム自体は新しくする必要はないという。

04年に大村市地域で

09年に県内最大の長崎地域で正式運用するに当たって、4年前から参加希望の調査や使い方のPRをするなど、医師らに理解を得る努力も見逃せない。

松本准教授。

同ネットが長崎地域で実施した今年2月のアンケートでは、診療に役立つ72%、診療の質を向上させる85%と高い評価だった。

(編集委員 野口和紀)

くまもとの

明日

KUMAMOTO FUTURE



患者のカルテ（診療

録）はなかった病院の数だけある。共有して

利用できれば治療に役

立ち、検査の重複も防

び、地域医療の質を向

上できる。そんな理

想に近づけようと、イ

ンターネットを通じた

医療機関の連携が長崎

県で広がっている。

2004年スタート

の「あじさいネット」

で、NPO法人長崎地

域医療情報ネットワーク

ウシシステム協議会（会

長・小尾重厚大村市医

師会長）が運営する。

ICT活用の先進例と

して知られる。

「かかりつけ医」を

地域医療の主体と位置

づけ、診療所機能を支

援する狙いだ。総合病

院が持つ患者の電子カ

長崎で進むカルテ「共有」

⑮

ルテを、かかりつけ医
や薬剤師が患者の同意
を得てパソコンで閲覧
し、診療や服薬指導に
生かす仕組み。

「情報提供病院」と
して協力する総合病院
は22。県内の主な拠点

病院に加え、隣接する
佐賀県の1病院も参加
する。閲覧する病院・
診療所などは9月現在
で205カ所が増え、
閲覧に同意した患者数
は3万人を超えた。
同ネット運営委員で

立ち上げから携わる長
崎大病院医療情報部の
松本武浩准教授（51）が
説明してくれた。

「適切な治療には正

確な問診が重要だが、
初診患者は情報が乏し
い。具合が悪く、しゃ

べれないときもある。

大抵の高齢者は大きな

病院にかかっているの

で、カルテの情報は貴

重です」

総合病院に紹介した

後も、患者の治療や経

過を把握することで、

患者が戻ってきた後の

治療や信頼関係づく

りにも役立つ。「『患者

に学べ』という言葉通

り、先進の治療を知る

ことは医師にとって勉
強にもなるんです」

CTやMRIの画像

も見るができるた

め、総合病院の高度な

機器を自院の機器のよ

うに使えるともいう。

長崎市大浦町の出口

外科医院で出口雅浩さ

ん（51）に操作してもら

った。「パソコンで病

院のホームページを見

る感覚（松本准教授）

との言葉通り、血液検

査の結果や点滴など治

療の状況が一目で分か

った。

（編集委員 野口和紀）

くまもとの

明日

KUMAMOTO FUTURE

ICTから見えること

情報通信技術

